

『蜻蛉日記』下巻の道綱母詠

——「大人の相聞」という贈答歌の可能性——

高野晴代

一 はじめに

「朝顔」巻、巻末近くに次の二首の歌がある。

月いよいよ澄みて、静かにおもしろし。女君、

(紫の上) こほりとち石間の水はゆきなやみそらすむ月のかげ
ぞながるる

外を見出だして、すこしかたぶきたまへるほど、似るものなく
うつくしげなり。髪ざし、面様の、恋ひきこゆる人の面影にふ
とおぼえてめでたければ、いささか分くる御心もとりかさねつ
べし。鴛鴦のうち鳴きたるに、

(光源氏) かきつめてむかし恋しき雪もよにあはれを添ふる鴛
鴦のうきねか

『源氏物語』「朝顔」巻 四九四頁。本文は『新編日本古典文
学全集』に拠る。

紫の上と光源氏の贈答と見えるこの二首を、それぞれ独詠歌とし、
叙景歌と考える説がある。⁽¹⁾それは、この二首が贈答歌ならば備えて
いる共通語句がないところ起因しよう。この対応について、贈答
歌として考える立場から、以前次のような解釈を行った。⁽²⁾

紫の上は、空の「月」と「流れる水（閉ぢ）れば「水」を捉え、
源氏は「雪」と「鴛鴦」と詠む。贈歌の語句には全く関与しない。
ただ「鴛鴦のうきね」に、源氏は夫婦の愛を表象するが、朝顔の姫
君のことはすでに紫の上に見透かされ、さらに藤壺を想い出した後
の源氏の答歌は、紫の上の贈歌を全く離れて、その歌の創り出した
世界のイメージを取り除くという方法を採った。贈歌の「水」をか
すかに受けて、答歌は「鴛鴦」を登場させたと言える。この贈答に
よって二人は、新たな関係を展開させることになる。

こうした解釈の基盤となったのが、後藤祥子氏に拠る当該贈答歌
に対する「むしろ味のある、大人の相聞⁽³⁾」との評であった。二人の
関係が成熟した時にのみ成り立つ特殊な贈答歌の存在。それが物語
で実験されているとしたら、日記のような作品では、実際の場面で
どう表現されているかという課題を、本稿では扱いたい。対象は
『蜻蛉日記』下巻の贈答、なかでも兼家との二回の贈答歌を検討す
る。⁽⁴⁾次節で、まず依拠する贈答の考え方を整理し、論を進めること
とする。

二 贈答歌とは

贈答歌論を扱う場合の基本的な文献を押さえておこう。

久保木哲夫氏は、贈答歌の原理として二点指摘された。第一に、返歌は贈歌の内容を受け、贈歌に使用されている用語を、そのまま返歌でも用いることが多い。第二には、贈歌の言おうとしていることに、あまり素直な言い方をしない点。これは「切り返す」ことなのであるが、贈歌の言葉を無視することでは決してなく、贈歌の語句を使いつつ、言い換えれば、贈歌に応じながら切り返し、答歌を詠む方法であると見る。この原理に拠れば、既述の「朝顔」巻の二首は贈答からは外れることになる。

また、その二首の形態は、紫の上、すなわち女からの贈歌であった。贈答は、男からするのが常態である。この点については夙に鈴木一雄氏が、女の贈歌に対して、「女の積極的な働きが看取され、女のおせり、歎き、訴え、渴きなどの強調がうかがわれる」とし、その後の贈答歌論に大きな影響を与えた。しかしながら、最近高木和子氏は、『和泉式部日記』を対象に、女からの贈歌の総論は鈴木一雄論が覆えるとしても、各論においては再考すべきと指摘した¹⁷。さらに、鈴木日出男氏には「異例の女からの贈歌」についての言及があり、「一般に男の贈歌が懸想に徹するのとは異って、どこかに反発や切り返しの契機をひそめている。もともと男の懸想を否定的に受けて立つのが通例である女歌なればこそ、このような「挑発」が可能だとみられるのである。」¹⁸とその特徴を押さえている。

既述の後藤論において「相手の歌に纏いつくような一体感のある相聞に比べれば、たしかに応答として疎遠なのだが」とされるのが、

本稿で問題とする贈答歌である。次節では『蜻蛉日記』を対象に「大人の相聞」という贈答歌の可能性を検討する。

三 『蜻蛉日記』下巻、作者と兼家の贈答歌

——原理に沿った詠

『蜻蛉日記』の収載歌数（巻末歌集を除く）は二六一首、上巻一二六首、中巻五五首、下巻八〇首である。三巻がほぼ同じ長さの作品である『蜻蛉日記』の上、中、下にはそれぞれ特徴が見いだせる。上巻の和歌の比率の高さが目立つが、回想に拠って書かれていること、さらにその和歌を核としての散文化の方法が、和歌を多く収載している理由であろう。また中巻は散文で書き上げる技術を作業者は蓄え、紀行文などにも冴えた筆が見られてくる。が、対象とする下巻は八〇首もの和歌を収載しながら、作者の歌は二一首で、しかも夫兼家に関わる歌は四首、さらに贈答として揃うものは二箇所のみという状況である。その贈答歌はどのように配置されているのか、略年表を記して概観してみよう。

天禄三年（九七二）作者三七歳位 兼家四四歳、道綱一八歳

一月一日 下巻始まる。年頭の決意、道綱の晴れ姿に感涙。

一月八日 兼家来訪、従者と侍女の贈答歌

一月一四日 兼家から袍の仕立て直しの依頼。

催促の兼家からの贈歌に作者が返歌する。

一月二四日 兼家、権大納言。

二月一日 兼家の凛々しい姿を見る。

二月八日 父の家に行く。

二月一七日 夢解きによる将来の暗示。道綱の将来の吉兆に喜ぶ。

これ以前に、兼忠女腹の女子を養女とすることを決心し、ことを進めていたことが語られる。

二月一九日 養女を迎える。兼家来訪。父娘、感激の対面。

閏二月四日 作者邸近火。

閏二月一〇日 賀茂詣。

閏二月一六日 雨。

閏二月一七日 兼家、来訪。方塞がりのため夕方帰る。

閏二月二五、二六日頃 作者から贈歌し、兼家から返歌。

閏二月二七日 雨。

〔閏二月二九日 兼家、大納言。〕

三月七日 兼家からの仕立物依頼に対し、承諾。

三月一〇日 石清水臨時祭。

下巻は、右以降、天延二年（九七四）の年末まで語られるが、作者と兼家の贈答歌は右の天禄三年正月と閏二月に二例残るのみである（傍線部詠）。この閏二月二五、二六日頃の当該詠が、二人の『蜻蛉日記』最後の贈答となった。この贈答歌の原理に沿った例から取り上げよう。

それもしるく、その後おぼつかなくて、八九日ばかりになりぬ。かく思ひおきて、数にはとありしなりけりと思ひあまりて、たまさかに、これよりものしけること、

（道綱母）かたときにかへし夜数をかぞふれば鳴の諸羽もたゆしとぞなく

返りごと

（兼家）いかなれや鳴の羽がき数知らず思ふかひなき声になくらむ

とはありけれど、おどろかしても、くやしげなるほどをなむ、いかなるにかと思ひける。このごろ、庭もはだらに花降りしきて、海ともなりなむと見えたり。

今日は二十七日、雨昨日の夕べより降り、風残りの花を払ふ。三月になりぬ。……おとなきことをなほおどろかしけるもくやしう、例の絶え間よりもやすからずおぼえけむは、なにの心にかありけむ。

〔蜻蛉日記〕下巻 二九二〜二九三頁。本文は『新編日本古典文学全集』に拠る。）

右の記事の直前、閏二月一七日に、方塞がりを承知で、兼家は作者邸を訪れていた。

十六日、雨の脚いと心細し。……あいなう、「夜数にはしもせじとす」と忍びやかに言ふを聞き、一さらば、いとかひなからむ。異夜はありど、かならず今宵は」とあり。

と言った兼家は、思った通りしばらく来ることはなかった。道綱母は思いあまって破線部「たまさかに、これよりものしけること」と彼女の方から歌を贈った。まさしく女からの贈歌である。道綱母の詠には、

暁のしぎはねがきもはがき君がこぬ夜は我ぞかずかく

（古今集）七六一

が引かれ、あなたが来ない夜は眠ることができないと詠むが、それは「かく思ひおきて、数にはとありしなりけり」として、来た日を

数えたことを転化して詠んだとの指摘がある。答歌は、右に示したように、贈歌の主要語句、「教」「鳴の羽」「なく」を受ける。「鳴く」に「泣く」が掛けられているのは言うまでもなく、「思ふかひなき」の「効」に「卵」を掛けて、修辭を駆使し、教限りなくあなたを思っている、それなのにあなたは泣くのか、と答歌としての切り返しも巧みである。それにもかかわらず、道綱母は、破線部2「おどろかしても、くやしげなるほどもなむ、いかなるにか」と記す。私から贈ったのに、歌を返すのみ。自分から贈ったことに悔やむばかり、この状況を自分の中で、どう受け止めたらよいのだろう、と自らに問うのである。

言葉だけを合わせたとしても、それでは何も変わらない。切実な女の心の声を、理解できない男の返歌、それは常套的な修辭による切り返しだが、かえって贈歌の詠者の哀しさを助長させている。庭を見れば、「庭もはだらに花降りしきて、海ともなりなむ」とある。落花に人生の悲しみを見るのは、「古今集」以来の歌語の伝統でもある。「今日は二十七日」には、閏二月一七日から訪れることがなかった兼家の行動を示しているであろう。三月になって、あえて破線部3「なほおどろかしけるもくやしう」というのも、道綱母から先に、女から贈歌をしたことへのこだわりが見える場面である。この後『蜻蛉日記』は、兼家の様子を語ろうとも、二人の贈答は決して記すことはなかった。この天禄三年閏二月の詠歌で、作者が痛感した贈答による不毛な伝達は、天延元年（九七三）八月の作者の広幡申川の移転、いわば離婚へと繋がっていったのである。

こうした言葉の上での緊密な対応構造を持つことが、むしろお互いの疎隔を生んでいる現象がある。さらに和歌が「詩的言語の修辭

ゆえの齟齬」をもたらし、物語としては「贈答歌におけるディスコミュニケーション」が『源氏物語』を主題的に展開させていく」と高橋亨氏が「源氏物語のことばへ」（座談会）で指摘された点は、贈答歌の方法において本質をつく。

『蜻蛉日記』の当該例などがそうした「源氏物語」の先蹤になり得ていると考えているが、右の座談会でも扱った中から二例を対象とすることによって、当該例を翻って検討しよう。

まず高橋氏の言及する「ディスコミュニケーションによる恋の悲劇」の例として、「帯木」巻、雨夜の品定めで、頭中将がかつての女（夕顔）の話をした場面を見る。

消息などもせで久しくはべりしに、むげに思ひしをれて、心細かりければ、幼き者などもありしに思ひわずらひて、撫子の花を折りておこせたりし」とて涙ぐみたり。（源氏）「さて、その文の言葉は」と問ひたまへば、（中将）「いさや、ことなること
もなかりきや。

（女）山がつの垣ほ荒るともをりをりにははれはかけよ撫子の露

思ひ出でしままにまかりたりしかば、例の、うらもなきものから、いとも思ひ顔にて、荒れたる家の露しげきをながめて虫の音に競へる気色、昔物語めきておぼえはべりし。

（頭中将）咲きまじる色はいづれと分かねどもなほとこなつにしくものぞなき

大和撫子をばさしおきて、まづ塵をだになど親の心をとる。

（女）うち払ふ袖も露けきとこなつに嵐吹きそふ秋も来にけり

女の「山がつの」の歌は、波線部、娘の心配からやむにやまれぬ思いで、女からの贈歌となったものである。「山がつ」と自らを卑下しつつ、撫でる子としたのは、自分とはかく娘を思つてほしいという切なる願いのゆえであつた。しかし、男は撫子を同種を示す「常夏」に言い換え、「咲きまじる」と母子を一括して、むしろ「こなつ」には、女との「寢床」を響かせた詠を返した。子どもを思つてほしい女の意はくみ取らず、「大和撫子をばさしおきて」とされた答歌に、女は「うち払ふ」の歌を残して、この贈答のあと、「跡もなくかき消ちて失せにしか」とある。たとえ、主要語句を使用し、ての答歌であつても、女からの贈歌に籠められた強い要求を、受け止められなかつた男の答歌に女が絶望した贈答の例である。

二例目は、「葵」卷の六条御息所と源氏の贈答の場面を取り上げる。車争い後、葵の上は、物の怪に悩まされていた。そのような折、源氏は御息所を訪ねる。こども、女からの贈歌で、御息所が詠む。

（源氏）「日ごろすこしおこたるさまなりつる心地の、にはかに
いといたう苦しげにはべるを、え引き避かでなむ」とあるを、
例のことつけと見たまふものから、

（御息所）袖ぬるるこひぢとかつは知りながら下り立つ田子の
みづからぞうき

山の井の水もことわりに（くやしきぞ波みそめてける浅ければ
袖のみ濡るる山の井の水・古今六帖）」とぞある。御手はなほ
こころの人の中へすぐれたりかしと見たまひつつ、いかにぞや
もある世かな、こころも容貌もとりに、棄つべくもなく、
また思ひ定むべきもなきを苦しう思さる。御返り、いと暗うな

りにたれど、

（源氏）「袖のみ濡るるやいかに。深からぬ御事になむ。

（源氏）浅みにや人は下り立つわが方は身もそぼつまで深きこ
ひぢを

おぼろけにてや、この御返りをみづから聞こえさせぬ」などあ
り。

（源氏物語）「葵」卷 三四―三五頁

御息所は、源氏の言い訳をいつものことと思つてゐる。しかし、「みづからぞうき」と結び、「浅ければ袖のみ濡るる山の井の水」を添えて自身から贈歌した。源氏は、「山の井」の引歌の部分から「袖のみ濡るる」を受け、さらに御息所の歌の語句をすべて受けて、切り返す歌で応じた。しかしその切り返しは、御息所の心を癒すことではなく、この歌が、直後、御息所の「物の怪」と変わる動機として働いてしまふのである。高田祐彦氏は「源氏の歌は、いかにも贈答歌らしく御息所のことばを捉えながら「気持ち浅いのはあなたの方」と切り返している。……ことばの次元での対応がなお一層二人の疎隔を促進させることになつたのである」と指摘する。言葉のみの対応による贈答の結果、通ひ合つていない二人の心の状況を明らかにしてしまつたのは確かである。この直後、御息所が「もの思ひにあくがるなる魂は、さもやあらむ」と思い悩む苦しさをもたらしたのがこの贈答であつた。

以上二例には、女の贈歌の真意を理解しない、あるいは理解したと贈歌の詠者に通じない答歌によつて、女は苦しみ、その結果、失踪、物の怪と化す悲劇を生んだ実態が描かれていた。その状況は、当該の『蜻蛉日記』下巻、主人公とその夫の贈答歌の最後となつた

天禄三年閏二月の鳴の羽の詠の後の、道綱母の沈潜してゆく激しい寂寥感と近似する。言葉の緊密な対応が、心の交流を促すものではない『源氏物語』への先例と言えよう。では、対応とは無縁の、今、言及した贈答と対蹠にある『蜻蛉日記』下巻のもう一つの贈答について次節で取り上げる。

四 『蜻蛉日記』下巻、作者と兼家の贈答歌

―原理に外れた詠

天禄三年一月十四日、兼家から袍の仕立て直しの依頼があった。作者はしばらくほっておくが、催促の兼家からの贈歌に作者が返歌した場面である。

かくて、なかなかなる身のびなきにつつみて、世人の騒ぐ行ひもせで、二七日は過ぎぬ。

十四日ばかりに、古き袍、(兼家)「これいとようして」など言ひてあり。(兼家)「着るべき日は」などあれど、急ぎも思はずあるに、使ひの、つとめて、「おそし」とあるに、

(兼家) 久しとはおほつかなしや唐衣うちきてなれむさておくらせよ

とあるに、たがひて、これより文もなくしたものしたれば、(兼家)「これはよろしかめり。まほならぬがわるさよ」とあり。ねたさにかくものしけり。

(道綱母) わびてまたとくと騒げどかひなくてはどふるものはかくこそありけれ

とものしつ。それより後、(兼家)「司召にて」などで、音なし。

『蜻蛉日記』下巻 二七〇～二七一頁

二人の結婚生活は、十七年ほどになろうとしていた。妻として、作者は長い間、夫の衣裳の調製を受け持っていた。それは正妻とは言えなくとも正妻級であることを世間に示す事実でもあった。今回も、兼家は自らの仕立て直しを作者に依頼する。下巻の道綱母はすぐには応じない。兼家の贈歌は馴れた妻に、着慣れた衣に馴染んだ妻と掛けつつ、重ねて依頼する。それに対する作者の返歌を見ても、贈歌の語句に関わらず、表面上には共通の言葉がない。贈歌の主要語句を、そのままその語句で返す道綱母の詠歌傾向において、この贈答を贈答として成り立たせている条件は何か。

「衣」「なる」も受けずに、作者は返しとして、「ふるものはかくこそありけれ」と言い放つ。「古女房で悪かったわね」と答える作者には、こう返しても夫である兼家にはわかるといふ大人の会話がここにはある。とすれば、共通語句がなくても、贈歌の詠者に答歌として認めさせることができるのは、長い間の詠者達の関係、ここで言えば長い夫婦関係と言えるのではないか。この贈答の後、「司召にて」などで、音なし」と記されるが、直ぐ訪問があり、むしろここでは順調な関係を醸成した贈答歌でもあった。

この大人の会話は、本稿でその可能性を考えている「大人の相聞」である。右に見たように、条件が揃った時に可能になるのであろう。本稿第一節で既述の「朝顔」巻、紫の上と光源氏との事例と勘案すると、第一には、夫婦関係が長年経過した後、詠歌されること、その意味では基本的な信頼が二人の間に存在すること、第二には、その詠歌の時点において、ある程度関係が良好であることがあげられよう。

下巻のこの辺り、当該の贈答にも言えるが仕立物に関わって、作

者の心が揺れる箇所でもある。¹²⁾ 第三節の年表に拠っても、二月一日の兼家の凛々しい姿は、作者が調製して着せた直衣を着て、作者邸を出る様子を評したものである。

……中門より引き出でて、さきよいほどに追はせてあるも、ねたげにぞ聞こゆる。

〔蜻蛉日記〕下巻 二七四頁

「ねたげ」をそのまま、ほんとうに憎らしいと、兼家に対して思っているのと取ってよいのであろうか。そこには古女房で悪かったわねと言いつ返せるような仲の夫を、むしろ誇らしげに思っている作者の意識が仄見えよう。また年表にもあるように、次には養女を迎えようとして、積極的に生きようとする作者が居た。

ところが、三月七日には兼家からの仕立物依頼に対し、承諾したとの記事がある。これは第三節で検討した閏二月二五、二六日の歌「かたときに」を贈歌とする、語句が密接に対応する贈答がなされた直後である。

この月、七日になりけり。今日ぞ、「これ縫ひて。つつしむことありてなむ」とある。めづらしげもなければ、「給はりぬ」などつれなうものしけり。ひるつかたより雨のどかにはじめた

り。
〔蜻蛉日記〕下巻 二九三頁

「めづらしげもなければ」として不思議なほど淡々と承諾してしまふ。頻出する雨を背景に、離婚への道を歩む作者の意識の萌芽を、そこに見るのである。

五 おわりに

贈歌の主要語句を用いない答歌の在り方は、贈歌の詠者が、返された答歌を答歌として認めてくれるという確信を得た時、答歌の詠者が詠めるものであった。その二者の関係が、まだ懸想し始めた時や、あるいは信頼が崩れかけそうな時では出来ない仕業である。その時には、たとえ、不毛な伝達結果が想定されようと、言葉だけでも緊密に合わせる作業が答歌の詠者には課せられていたのである。したがって贈歌に付き合わない答歌は、長い間に培った夫婦の信頼関係の上に、はじめて詠じることができると言えよう。

贈答歌は、原理があるものの、その方法をずらすことによって、贈答を交わした後の新たな展開を促すことがある。「大人の相聞」はそうした意味でも、その一つの方法と言えるであろう。

注(1) 『湖月抄』以来の叙景歌説を退け、紫の上のこだわりがつかない光

源氏の答歌とみる説(今井源衛「紫の上」『源氏物語講座 第三卷』有

精堂 一九七二)、また和解の後の素直な気分対話と考える説(吉岡

曠「鴛のうきね(上)(下)」『中古文学』一三・一四 一九七四・五一〇)

などがあり、さらに叙景歌ではあるものそこに心情の吐露を読み取る

べきとする説(鈴木裕子「源氏物語の歌ことば―朝顔の巻の光源氏と紫

の上―」『叢書想像する平安文学 交渉することば』第四巻 勉誠出版

一九九九)、紫の上の孤絶した心情の独詠歌と見る説(針本正行「光

源氏の独詠歌」『平安女流文学の表現』おうふう 二〇〇一) など諸説

ある問題の箇所である。

(2) 拙稿「『落標』巻の贈答歌―選択された齟齬―」(紫式部学会『むらさ

き』二〇〇五)

- (3) 後藤祥子「齟齬することば」(『短歌』一九九七・六)
- (4) 拙稿「贈答歌の方法―『竹取物語』をめぐる―」(『古筆と和歌』笠間書院 二〇〇八)では、『竹取物語』を中心に、贈答歌の方法について考察した。その中で、『竹取物語』との相違を論じるため、本稿の対象である『蜻蛉日記』を扱っており、本稿と重なる部分がある。
- (5) 久保木哲夫『折の文学 平安和歌文学論』笠間書院 二〇〇七
- (6) 鈴木一雄『王朝女流日記論考』至文堂 一九九三
- (7) 高木和子『女から詠む歌―源氏物語の贈答歌』青簡社 二〇〇八
- (8) 鈴木日出男『古代和歌史論』東京大学出版会 一九九〇
- (9) 『蜻蛉日記』(『新編日本古典文学全集』)の頭注
- (10) 「座談会」源氏物語のことばへ」(『文学』九、一〇月号 岩波書店 二〇〇六・九)
- (11) 高田祐彦「道綱母から六条御息所へ」(『源氏物語の文学史』東京大学出版会 二〇〇三)
- (12) この辺りの作者の夫に対する服飾描写について、「我が染めたるも言はじ」(『蜻蛉日記』下巻 三一〇頁)と述べる作者の心情表現を中心に「妻ならではの味わえぬ生活の中の満足感」を作者の矜持として扱った論(岩佐美代子「我が染めたるも言はじ―蜻蛉日記服飾表現考―」『王朝日記の新研究』一九九五)がある。下巻の作者の意識の検討に有効な視点である。